増補
きのたっ たづくり

393
437

始

新編

きうた。たづくり

393-437

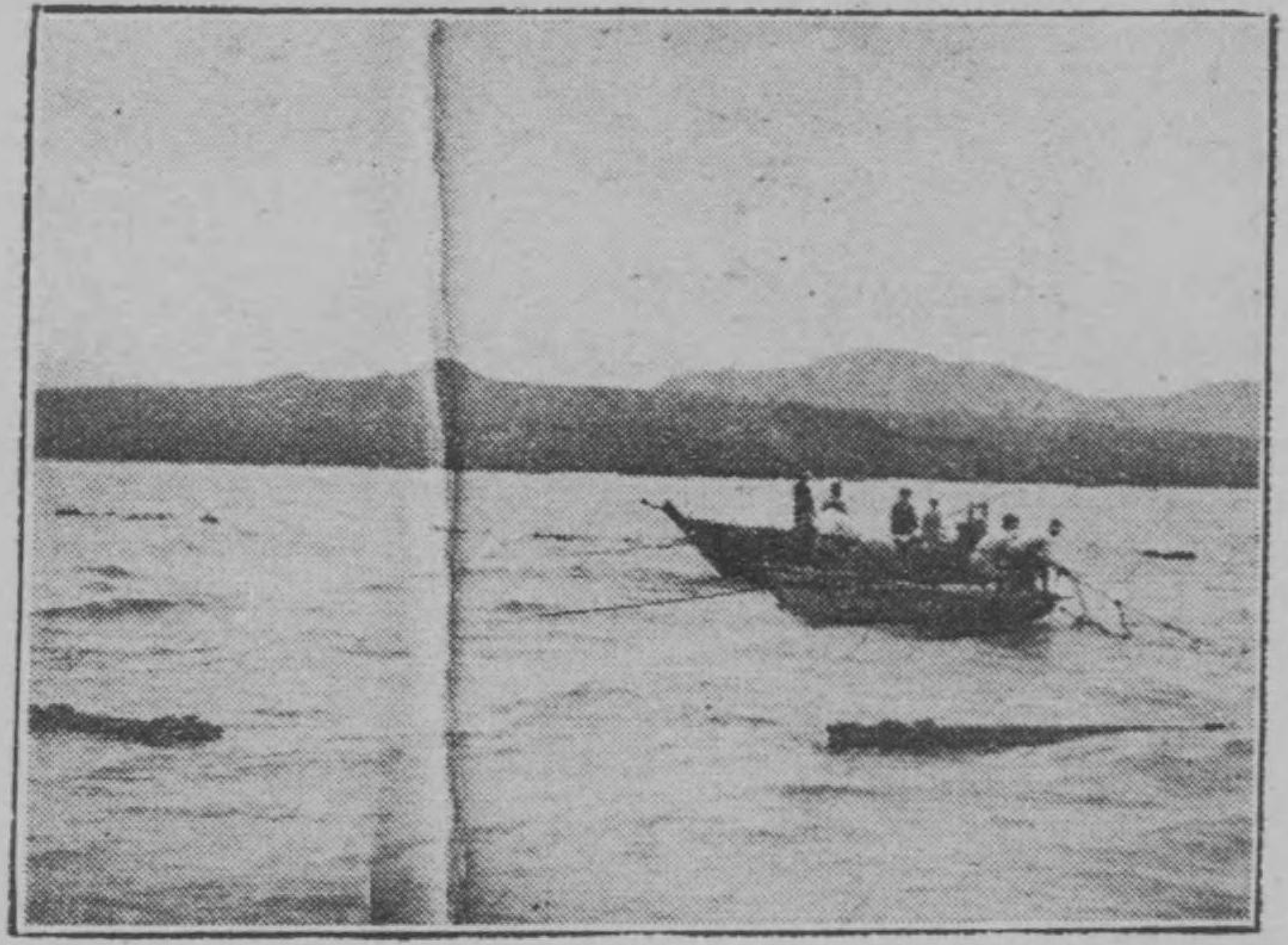
大正十一年二月印行

鰹餌取用張揚綱の成績

（八重山郡坂田安次郎實行分）

大正
11. 11. 15
内交

沖縄縣立水産試驗場



揚網操業ノ況

たつくり

きびなご

鰹餌料供給に就ては多年官民の苦心せる所縣は大正八年度以降毎年補助金を支出して餌取網を改善し奬勵及餌取網漁撈手の派遣を爲せり八重山郡石垣村坂田安次郎は夙に餌取網の改良に志し苦心經營すること多年漸く大正十一年に至り張揚網を以て方言シイラグワの一種（本人はさかたたつくりと命名せり）を多量に捕獲し之を餌料として試みたるに成績良好なりき

方言シイラグワは鰮の一種にして其分布廣く本縣各區の沿岸之が群來を見ざる處無く其餌料としての價値も一般に熟知する所なりと雖共性質敏捷にして從來の漁具漁法にては容易に捕獲し難きを遺感とせり而して張揚網を用ゐて容易に之を捕獲する途を開きたるは實に

斯界の一進歩なりとす
從りて漁具漁法其成績の梗概を印刷に付し一般當業者の參考に供せんとす普く之を利用して毎年缺乏を告る鰹餌料の供給を緩和するを得ば幸甚の至りなりとす

大正十一年二月

沖繩縣立水産試驗場

沖繩縣指令第一二二六〇號

八重山郡石垣村字大川

坂田安次郎

大正九年四月三十日付願鰹餌取網補助ノ件聽許シ金壹千圓補助ス

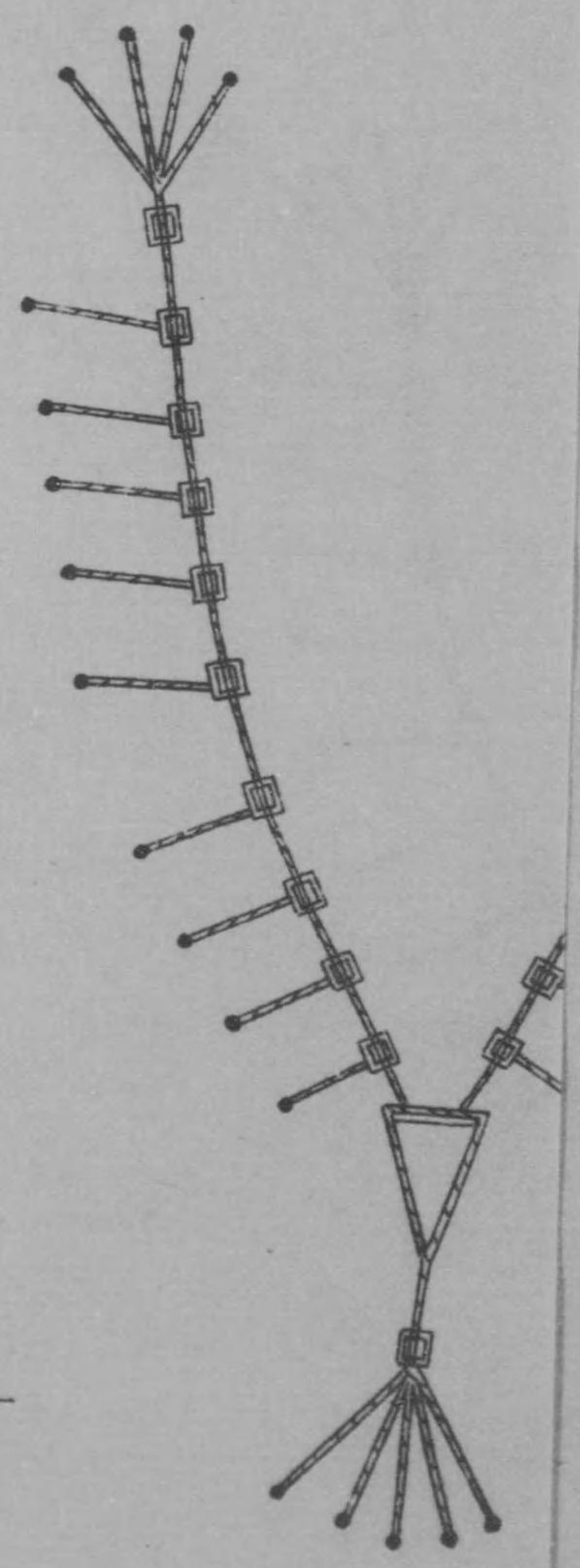
但シ左ノ通心得ヘシ

記事略

大正九年十月十八日

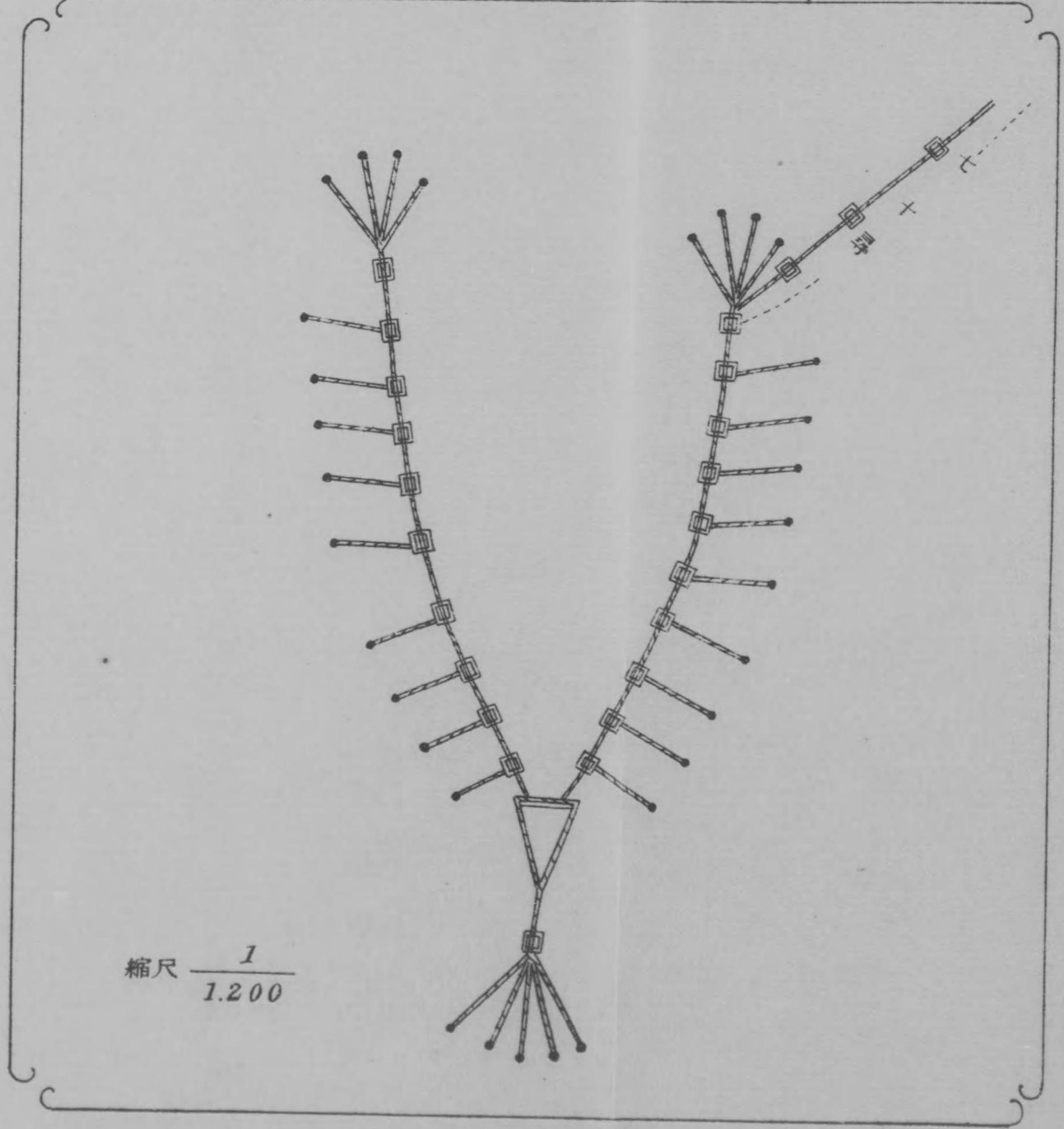
沖繩縣知事　川越壯介　印

張揚網敷設圖

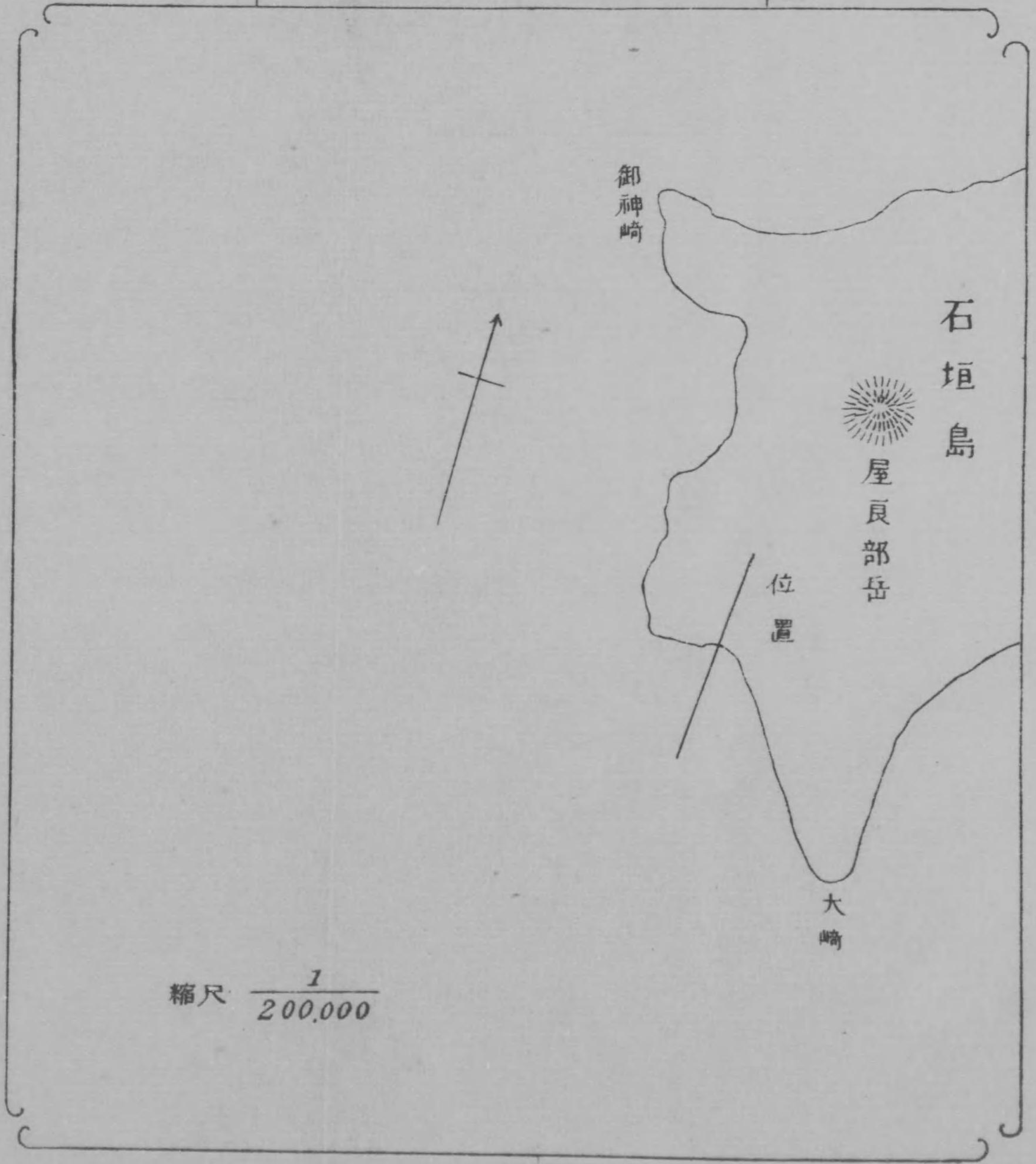


縮尺 $\frac{1}{1.200}$

定置漁業張揚網敷設圖



定置漁場圖

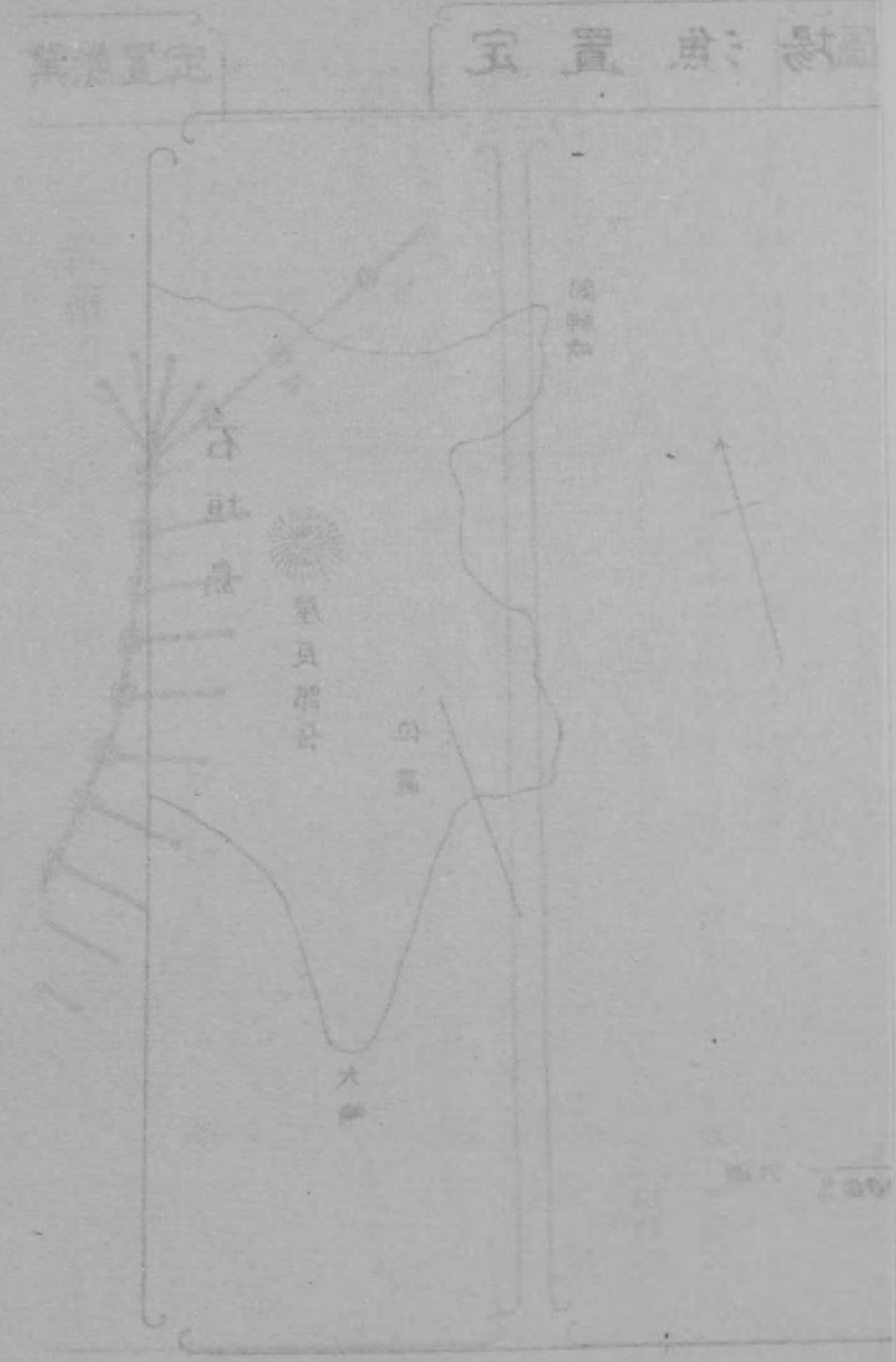


新稱坂田たつくり

緒言

坂田安次郎

古代支那の大公望は五六十年にして一魚を得ず、康王父は五百年にして一魚を得ざるも亦善く釣るもの、名手である。私が先島一圓の林產動植物の開發を心掛けましてより、淺學寡才を顧みず、其の消長に關して周密の注意を怠らず就中私が夙に眼を魚撈と餌料との相對關係に著け常に心を勞し身を苦めて居ましたが、幸ひ沖繩縣より濃厚なる御保護を蒙りました上、私を愛して下さるゝ諸賢より實に言ひ盡されぬ、さま〴〵の加勢を與えられて居るが、私の餌料漁は極めて大幹的な大仕事で、當るままでは努力は無効にして永久に續つかねばならぬと、自ら勵ましております。



漁船のこと

日露の戰雲全く霽れた、三十九年頃、世の凡てが、皆な歡樂の杯を滿喫し、物價は暴騰、殊更著しく貴きは魚の價てありました、其の事實は漁船の不備幼稚が主なる淵源である事を看破された東京帝國大學教授?「ウエストン」氏は造船學の見地から、和漁船に「ガアトナー」式發動機を据付け、船型を改刷し、横濱市に造船所を設け、直ちに二隻進水されて世に問ふた、當時農商務省は奬勵として一隻(五噸級)を買上け、他は民間の需めに應じた、是れを海に試みるに操作自由、優良と經濟的たるを會得し、注文一時に殺到せり偶々大阪市の商其の職工を買收し拉し去つて、造船業を大阪に草創し造船能率頓かに加はり、現代の隆盛を見るに至りました。

海の利用

官に於かれ、日に月に産業振興に鋭意熱心、各方面各種の事業を督勵されをるが、特に水産業卽ち海の利用より單位魚獲の增收を慫慂された以來、先島(サキシマ)方面の漁況活潑となり眞劍的となり、世は所謂自由競爭と轉變したけれども、永久に變らざるは島の、面影である、なぜなれは、隴を得て蜀を望むは人情の通弊なれど、私か粗枝大葉ながら、先島に於て餌料缺乏を防止し自耕自給の實を擧けたいのが信念であります。

餌魚の種類(方言モンダネ)

鰹はイワシを嗜食することは、旣に一般諸賢の熟知されたる所でありますが、雜小魚を代用するをも防けない、併し私か數年來の經驗を基本として先つ第一に、魚の捕食力を調べますれば、體長、體量、雌雄の別により捕食數か一定せず、猶餌魚の種類により、好き、嫌ひが現はる、更に氣象の及ぼす影響もある、想ふに體長體量兩なから大なるものは、小なるものよりは捕食數多いと思ふ。

先島に産する重なる餌魚は左の六種なり但し發生期は互に異なる

一 方言 シイラ

二 方言 スルル (他府縣で稱するキビナコ)禁止魚

三　イワシ　　　四　小鰺

五　ヒラコ・イワシ　　　六　さかた・たつくり「?」

「さかたのくり」を各種と對比して異同を校するに、シイラと唱ふる者に比較せば差異の點あり、宮崎縣油津地方に產するキーイワシ、に酷似してをるが其形態稍々大きい位なり、餌として好評であります、また惡評もあります、而して、たつくり、は臺灣にて未だ採捕されてをらぬと聞けば、島の特產でありましまいか。

附記　養蓄の缺點鱗脫落し易く、斃死するもの多い。

對照

種名	さかた・たつくり	ヒラコイワシ
形態	稍、圓く、均齊美	側平
體長	六十粍（尾鰭を除く）	九十五粍（同上）
尾鰭	正尾にして彎曲淺く黒線四條あり	正尾にして彎曲深くして黒線を缺く
鱗列	甃瓦に狀正列	同上
鱗形	楕狀「?」見方によれは圓狀	殆んさ圓狀
鱗脈	緩き、波狀曲線にして五條、四線の下縦線四條あり	七條の竝行曲線
鱗	脫落新生「?」	脫落せす

液漬變態の有無　二週間酒精、ホルマン液に浸漬せしたつくりは體色褪けず、生氣ありて銀色を呈す、眼球變色なし、ヒラコイワシ、は體色褪めて朦朧となり、眼球白く、鱗列浮き出つ。

魚學先生の說によれば、魚に硬鱗硬骨と、軟鱗軟骨とあり魚鱗の新陳代謝するものとせざるものとありと云ふ、さかた、たつくりは軟鱗にして且つ形態美はしいから餌として必ず魚の嗜慾を衝動するは必然であります。

附記「往年鰹の胃囊よりタコブネの一種を採集す」。

「烏賊屬の發生夥多しければ魚の食慾俄かに減却して不漁となる」。

網と仕様書

漁網を張りあけ網と稱すれとも、地方的に少しく改良し潮流や風向と調和を取れり、之れに要したる費用は左の如し

仕様書

品目	品質	數量	單價	價格	備考
綿網地	綟シ二十三號	二三〇巻	〇・三〇〇円	六九・〇〇〇円	袋用
同	九本合セ十六節	一〇〇	〇・六五〇	六五・〇〇〇	袋脇用
同	九本合セ十四節	三九〇	〇・六三〇	二四五・七〇〇	袋前用
同	十二本合十節	七〇	〇・五八〇	四〇・五〇〇	
同	十二本合六節	一〇〇	〇・五九〇	五九・〇〇〇	

同	十二本合十二節	六〇	〇・六一〇	三六・六〇〇	アバ下用
孟宗竹	長二十尺切	六〇	二・〇〇〇	一二〇・〇〇〇	アバ用
棕梠縄	徑四分五厘	三五〇	〇・三〇〇	一〇五・〇〇〇	ヘリ縄用
黒縄	徑四分	六〇、〇〇〇	〇・四四〇	二六四・〇〇〇	アバ網渡リ用
藁縄	徑五分	五、〇〇〇斤	〇・二五〇	一二五・〇〇〇	縄網ヘリ縄錨袋ホタン用
染料	八重山産ヒルキ皮	二〇〇	〇・一五〇	三〇・〇〇〇	煮出シ用燃料代共
仕上	綿糸網類	二五人	一・八〇〇	四五・〇〇〇	給料食費共
同	縄網の類	一二	一・八〇〇	二一・六〇〇	同
同	錨縄袋類	四〇	一・〇〇〇	四〇・〇〇〇	日給食費付
敷込		三〇	一・二六〇	三四・八〇〇	漁夫十人雜夫二十人
運搬費	漁場マデ			一二〇・〇〇〇	貨物傳馬船二日間借切
計				一、三二七・二〇〇	

手船又附屬品仕様書

經常費

品目	形狀	數量	單價	價格	備考
親船	長三十五尺 肩巾七尺	一	円	五五〇・〇〇〇	帆、繩、錨、天幕其外一切ヲ計上ス
下船	長二十八尺 肩巾六尺	一		二五〇・〇〇〇	同上
平船	長二十四尺 肩巾五尺	一		一五・〇〇〇	同上
生洲籠	枠付角形	二	〇・三八〇 一・〇〇〇	五三・二〇〇 一二・〇〇〇	二九號モジ網百四十尋綿糸一貫二百匁
同	竹籠丸形	一〇	一五・〇〇〇	一五〇・〇〇〇	
浮竹	孟宗竹	一四	三・〇〇〇	四二・〇〇〇	生洲籠浮用
網貝	黑繩口輕一寸 長百尺	一二	一・五〇〇	一八・〇〇〇	同上
木製錨		一二	五・〇〇〇	六〇・〇〇〇	同上
雜費				二〇・〇〇〇	
計				一、三〇九・二〇〇	

一箇月に消耗する費用左の如し

支出

一金四百五十一圓四十錢也

內譯

一、金五十九圓四十錢也　泥米一石八斗代　漁夫食料（地米、臺米混合）

一、金四十二圓也　漁夫副食物薪炭料

一、金五十五圓也　繩、綱、綿絲、絲網諸具修理其の外

一、金二百七十五圓也　漁夫給料助手日當、延人員三百人、給料最高月額一人金四十五圓、最低金二十圓也

一金二十圓也　諸雜費（諸品及ビ藥品代）

備考

漁場の位置　八重山郡石垣村字ヤラブ地先き海深二十二尋線。

漁撈期　四月より十月に至る。

漁夫　宮崎縣油津より網敎師濱田彌七外助手二名を聘し沖繩縣絲滿、宮古、本部、より七人

漁獲物　鰛、小鯵、ヒラゴイッシ、スルル、シイラ坂田たつくり。

蓄養法　竹丸籠胴廻り一丈六尺深さ四尺五寸、口經二尺丸浮竹を四方へ結束す、（臺灣に準す）

漁獲物の處理　三晝以上生洲籠内にて蓄養し、鰹餌魚に使用す餌に過せざるもの、斃死したる者は生、干、鹽藏、として處理す（卷首の圖參照）

張揚げ網

網の構造及び操作に要する經費は極めて儉約を旨とせるも網の耐久力は未だ充分なる研究に到らず、保存年限の長、短は直接斯業の浮沈となる、考慮いたしてをります、網の布敷に就ての位置は海岸より緩き傾斜の海底を選び、段々と海深を増して凹凸なきところ」海底の土質は白砂を避け泥土を被覆せし場所（稍々黒味を帶ぶるを好さす）「網を敷くとき岬角の地形、海の深淺を考え、陸地に接近せざること、」網の出入口は南東の方位をとる流行風や潮汐の工合により、多少の修正を要します、」海深は十尋乃至二十二尋」線なり。

魚の集散（一）

一日中に於ける魚の集散密度は一高潮より次の高潮まで、或は一低潮より次の低潮までの間隔によりて各々差別あります、術語の日潮不同に起因する、概ね東天紅を呈し御來光（ゴライコウ）を拜む頃は魚族生氣溂潑として來集す、故に午刻に漁獲せしものは生命永續せず養蓄籠にて十時間を保つは稀なり（焚火法によるも同じ）夫れより夕陽松間に映じ暮色蒼然たるの刻は魚群縱列を作り稚魚を保護しつゝ成魚殿をなし正々堂々以て警め以て進むか如く沖へ沖へと淺き海を離れ去る。

前に日潮不同にて申し述べましたか、また一箇月中の魚の去來、漁獲の増減は月潮間隙に密接なる因果が伏在してをるさて月潮間隙と云ふは普通朔より次第に減少し次の上弦との中間に於て最小となり之れより増して上弦を徑、次の望と上弦の中間に於て最大となる、之れより後は減少して望に至り後の朔より望に至るまでの現象を繰返すとの説は姑らく措きて漁獲數を見るに丁度豊漁の期日は陰暦二十日乃至翌五日、の間を好適とし同七日より十八日迄の間は、あまり適順はしくない、されば太陰が段々細くなりて行くとき卽ち下弦より朔を經て上弦となるの頃が豊饒であつて、太陰が段々太くなつて行くときを經て、細くなるとき換言せば、上弦より望を經て下弦となるときは、思はしい漁がない譯となる、但し月齢同一なるも太陰の距離により潮差を異にする隨て魚の去來にも平、仄があるを知らねばならぬ。

鹽漬法

私が僥倖にして餌魚を發見し餌として聲價を認められたと假定し更に是よりして百尺竿頭一歩を快轉し、坂田たつくりを露西亞式鹽漬とする必要を感じます、何故なれば、鰹漁船の行動を敏活ならしむる爲めには船の補給聯絡を完全にしなければならぬ、漁法の原則としては漁獲力は質と量の相乘積に相當いたしますからである。

餌魚は「生きたもの」と確定してをるも、間斷なく供給すべき重大なる社會奉仕の義務を強要せられをる、餌漁同業者の勤怠・手腕・鈍感より招く需用者は何時も莫大の苦痛を享けてなる、故に配供機關の安全瓣として擬餌の法によるも不能でないから、鹽漬魚を使用し以て專ら人力により極微の調節をなし得たい。

魚を鹽漬せば、原形を損するものと、妄信するが、私の企劃にすれば原色確保、形態

完美と取扱ひ頗る輕便なり、若し「生きもの」のみに依賴せば多大の費用を要します、生產費を高むるに反し先島節の賣價比較的低廉なるは由々敷大問題であります。

素より餌の用は、魚を誘惑する一の詐略であるから、魚の形態・色・生氣などは必要なる、條件である現今擬餌の粋は佛蘭西巴里を中心として產出するが獨特の精巧さは藝術的で體裁優美で、到底他で「まね」の出來ぬものと肯かれる。

普通に餌魚を投入すれば、比重により、泡沫を生しつゝ浮沈す、キラ、キラ、〱と發光作用を起し金いろ、銀いろ、が連續して繰返され、藍青色の海水を攪拌するや鰹は此の燐光に眩惑され、活氣横溢となり、剩さへ海面を掠めて低く、高く飛揚跋扈する鰹鳥奇聲を弄して「こけおどし」せば魚は其聲樂に合はせて右し左し踊る舞臺は狹められ遂に餌と食慾のしがらみに挾まり大いに力を逞うするを得ず慘な風情となる。

要するに鹽漬魚を餌として用ゐる機會は多い、唯だ魚群の密度海面の溫度、比重と海水の透明度―清か濁か天候の晴・曇・風向と其力とを知るにあり以上具備し好機を逸せ

ざれば可なりであると思はる。

附記　新らしき試みを川勝富三郎氏實行された、去る六月タブミノオン魚（臺灣目高）を撒餌として好果を得たりと該魚の利用は世界一だと臺灣水產協會は發表せらる。

希望のいろ〱

先島海洋には海藻類が絶無でないが乏しい、藻繁茂の狀況により魚屬の多寡を豫知するを得べしと誠に然り產卵隱れ場となるべければなり、泥んや熱帶の海水は清淨にして透明なり是に又水溫高きために石灰藻や珊瑚礁の發育旺盛であります、今や水產業益々發展し魚族遠く沖へ去るに當り藻類を移殖したいと思ふ、而して藻の效や甚大で枯死せざる限り河水が陸土より運搬する泥土を保持するを以て波浪の動搖あるも海水を混濁せざるなり。

列島に於て海陸の產物自滅に急ぎつゝある、何んとなれは林產工業の發達に伴隨して

魚集林の樹木を亂伐してをる勿論山林の鬱閉度の良不良は漁場の興廢となる。

鰹鳥日を追ふて將さに殲されんとすその絶滅をかなしむ、該島は沖を洄遊する魚群を偵知して魚を近き海へ誘引するの案內者となつてをるが、鳥の營巢地を破壞し、卵を亂獲して各自に戒飭せざるなり、由來公共心なく共同生活の慣習がない故かとも思はる。

總　論

一利一害は數の免れがたい次第なれども各々自制心を豐かならしめ彼我相扶け水產業に對する愛着の本性を正直に示していたゞきたい、先島には古風の香が漂ふてをる、が今日の商業地理上、偏つてをることを記憶して置たい。

大正十年漁期の色

（本文は石垣島測所長岩崎卓爾先生が特に鰹漁同業者の爲に寄書せらる）

寒い溫いと云ふ、感覺卽ち溫度、波は恰も蛇味線の音調と型式が同じで歲の初めより歲の終りまで二六時中波を打ちながら進むで行くのが普通である。が。さりとて平均値の價値を餘り重要視すると變な思ひ誤りをすることが出來る樣であります。なれど本漁期の歲色たるべき海面溫度、最多風向（主風）風速度の强弱、雲量の多寡、大氣中の乾濕の步合など一括して御參考に供したい。

一般に春の彼岸と、秋の彼岸の前後の天氣模樣には殊絕なる注意を拂はれて居る、彼の久米島大爺が案出せし二月風廻りは支那東海の信風交替期を明示したもので春馬甑（ハルマカン）が露拂ひとして甸ひ出る（本年は三月十二日現ある）次に九月風廻り等を囊括推測せば島の、太陽風とも申したい丁度太陽と一所に一めぐりするからである。

鰹鳥無數天日を蔽ふて飛翔する、活氣滿々たる漁船が東へ西へ南へ北へ鰹群來た、浮び出ぬ。海に黑線を引きて魚躍るも餌付が惡いと、魚と漁師との間柄は三勝對お園の感がある、或は十數時間を汽走して魚群と鬪ひ美事なる敗を取るなどの嘆聲が起る是れ海洋研究を產業化せざる爲めではなからうか。

畢竟するに黑潮の勢力消長は吾人に直接關係あるべし、月竝の言條ではあるが潮は呂宋、臺灣の東側を北上する—流速は每日三十里より四十里に至り、但し信風に左右せらる—

この流が與那國島に衝突して白泡を立て大渦を巻きつゝクバ島を洗ふとき、然も強烈な信風が吹き付け擾亂したならば流の方向が南の沖合(?)へ曲けられ、又信風、が止んで風壓が減殺し、南寄の風が吹き勝つときは、流は忽ち勢よく直進するものと思ふ、州南の漁場は唯だ天候に支配さる、のみ故に先づ潮流癖を會得するが必須の條件ではありますまいか何せなれば水溫の昇降は主として風位の如何による南西風吹けば昇り風向北となれば大に降るからである。

金華山沖の漁師の秘傳に「底の親潮が強くなるとヒドイ東風が吹く」申して居ります、然らば黒潮と戰ふ漁師の秘訣は何にか？軍艦霧島、小西大尉の報文によれば本年三月二十日過ぎまでは黒潮は遙か沖合を流れ、三月二十五、六日頃はずつと陸に近いて居りました、之は四月乃至五月に土佐沖、日向沖を通りました各艦の航海長か一様にさう感じたと申して居る云々（大正一〇、一一、三）

附記

大正十年三月十七日より同十一月一日に終る漁期中の氣象概況（石垣島測候所毎午前十時一回觀測）

月	半旬期	海面溫度 本年	海面溫度 昨年	最多風向 本年	最多風向 昨年	風速度 本年	風速度 昨年	雲量 本年	雲量 昨年	比重 本年	比重 昨年
三月	一七—二二	七四·二	七一·六	南	北東	七·一	八·六	二·四	八·四	二五二	二五二
	二三—二六	七五·九	七二·六	北	北東	四·九	七·二	八·四	八·二	二五四	二五三
	二七—三一	六八·五	七五·六	北	東南東	九·七	九·四	一〇·〇	三·二	二五九	二四二
四月	一—五	七三·六	七六·三	東南東	南東	一一·二	八·五	七·〇	六·二	二三八	二四五
	六—一〇	七三·〇	七二·七	東	北東	八·七	七·四	六·八	八·六	二五四	二四八
	一一—一五	七五·九	七三·八	南	北西	六·〇	六·七	六·六	九·二	二四七	二四七
	一六—二〇	七五·四	七九·八	北	東南東	五·五	四·四	五·六	四·四	二四三	二四六
	二一—二五	七七·二	七四·七	南々西	北東	五·一	九·〇	二·四	四·六	二四八	二四五
	二六—三〇	七九·〇	七五·二	南	北東	八·五	八·三	二·八	八·八	二三九	二四〇
五月	一—五	七九·五	七五·四	南	北	九·八	四·六	五·四	八·四	二三七	二四五
	六—一〇	七九·七	七五·四	南々西	北	一〇·七	五·六	九·六	六·八	二四〇	二四三
	一一—一五	七九·八	七八·四	北東	北々西	八·八	六·一	八·八	六·六	二三三	二三二

月	一六—二〇	七八・三	七八・六	北東	東	一一・一	六・六	一〇・〇	七・〇	二三八	二三六
	二一—二五	七八・二	八二・八	北東	南	六・六	九・七	九・二	四・六	二三六	二三七
	二六—三〇	七八・二	八〇・二	北	南西	七・〇	四・二	九・二	八・二	二三九	二三三
六月	三一—四	七九・〇	七九・五	定ラズ	東	七・九	五・八	六・四	八・四	二四二	二三二
	五—九	八〇・一	七九・七	南	北西	五・一	五・七	八・八	四・四	二四二	二三五
	一〇—一四	八五・七	八一・七	南々西	南	五・〇	九・三	四・八	六・四	二三七	二二五
	一五—一九	八二・八	八一・三	南々西	南	七・七	九・二	五・二	五・二	二三一	二三二
	二〇—二四	八二・六	八四・六	南西	南	九・七	八・〇	八・二	一・六	二三四	二三〇
	二五—二九	八四・六	八二・六	南西	南	九・六	九・七	五・四	八・四	二三六	二二二
七月	三〇—四	八一・七	八三・三	南西	南東	七・二	七・七	八・二	八・八	二一三	二三〇
	五—九	八三・八	八五・八	南西	南々東	五・三	四・八	〇・八	一・四	二三三	二三五
	一〇—一四	八五・六	八四・四	南	南々西	五・九	一一・二	二・六	七・四	二三〇	二一四
	一五—一九	八四・六	八三・一	東	南	七・三	一三・〇	四・〇	八・六	二三九	二三七
	二〇—二四	八二・八	八二・四	東	東	一四・二	一三・一	八・二	一〇・〇	二三八	二一八
	二五—二九	八六・四	八四・二	南西	南東	七・五	六・六	五・〇	七・〇	二三八	二〇七
八月	三〇—三	八四・四	八四・九	南西	南	六・八	二・九	四・四	七・〇	二三五	二三六
	四—八	八三・五	八五・一	南	南々西	一三・四	六・三	五・四	八・〇	二四四	二三四
	九—一三	八二・六	八五・五	南西	北西	九・一	七・三	七・四	二・六	二三三	二一五
	一四—一八	八二・八	八五・三	北西	定ラズ	八・五	四・七	四・四	六・二	二三二	二三二
	一九—二三	八二・九	八三・七	南西	南	五・五	三・八	六・六	七・〇	二四五	二一五
	二四—二八	八四・四	八五・八	東	南東	六・六	三・七	六・二	二・四	二三〇	二一七
九月	二九—二	八三・一	八四・六	南東	北	九・〇	一〇・八	三・八	五・〇	二一五	二三五
	三—七	八二・九	八〇・六	南	南	三・九	一九・三	九・六	九・六	二四七	二二四
	八—一二	八五・一	八三・八	南西	南々西	四・一	三・〇	三・六	一・〇	二三五	一九五
	一三—一七	八二・〇	八四・〇	南	南西	一〇・九	二・二	七・四	五・〇	二三一	二三八
	一八—二二	八一・一	八四・〇	北	東	一〇・〇	五・六	九・二	五・六	二四八	二二三
	二三—二七	七六・一	八二・〇	北	東	一〇・七	七・三	五・二	五・四	二五〇	二一八
十月	二八—二	七七・五	八〇・四	北	南	一〇・三	五・九	六・二	六・六	二五三	二三八
	三—七	七七・七	八一・七	北	南東	一〇・三	六・九	四・四	六・〇	二四九	二〇八
	八—一二	七七・七	八二・〇	北	北東	八・一	五・二	二・四	七・三	二四六	二三五
	一三—一七	七六・六	七七・七	北東	北東	六・七	一〇・五	三・四	六・二	二五四	二三九
	一八—二二	七八・四	七六・五	南	北	六・三	一三・五	七・四	七・〇	二五二	二三九
	二三—二七	七七・四	七五・二	北東	北東	八・七	九・七	七・四	一・八	二五一	二四〇
	二八—一	七三・二	七五・四	北東	北々東	八・五	六・三	一〇・〇	三・八	二六〇	二四六
平均		七九・九	八〇・二			八・一	七・四	六・二	六・二	二三九	二三〇

備考　温度華氏、風速度は一秒米、雲量は十分率、比重は温度の更正を施さず

一、0000を省く

露光量違いの為重複撮影

特例の現象

旋風　五月十六日午後九時三十分美崎泊海上に起り「タ」通りに上陸し北西に進行したるが如く通路附近輕微なる被害あり

黄砂　九月三十日午前十一時三十分より十月十四日午後三時二十分まで濃密にして視界極めて狹少なり

卷尾に添へて

日誌より

露光量違いの為重複撮影

特例の現象

旋風　五月十六日午後九時三十分美崎泊海上に起り夕通りに上陸し北西に進行したるが如く通路附近輕微なる被害あり

黄砂　九月三十日午前十一時三十分より十月十四日午後三時二十分まで濃密にして視界極めて狹少なり

巻尾に添へて

日誌より

柄でもないが鰹漁と餌魚との相對關係は恰も鳥の兩翼如しで、其の何れを缺ぐも滿足な效果を得るは難事である前者は自然的回遊性のもので、人力を以て如何ともなし得ないが、後者は或は程度迄は人爲的に補充は出來るものだと自惚て、大正六年三月以降之が捕獲の研究中であるが、八重山島は比較的餌料に屬する種類少なく浮遊狀態が薄疎なる當常は思しき成果を得ない原因であつて常に心を苦めで居る、玆に仰〳〵しくも初年以降の經過の有のまゝを掲げて、聊たりとも同業各位の御參考ともならば幸甚。

大正六年度は

即ち初年度は全く馬車馬的で、無鐵砲にても鹿兒島喜入や櫻島の漁夫を迎へて、八駄網を以て初めたが、漁場の位置の不案内と漁夫の罹病が(八重山の義務病マラリヤ)續出する、彼等が望郷病に囚はれ早やウカ〳〵と浮腰となり、思はしき漁も見ることなく無駄骨に終る。

大正七年度は

操業上採長補短の意味に於て竹之内久吉氏より特に漁夫の補充を受け、漁場や漁網に多少の工夫を凝し、初年度の八駄網を以て著手せしに漁獲物は主に、ムロ、アジ、サバコ、キビ、で、餌魚としても適して佳良であるが遺憾ながら此式は、多數從業者を要し焚込み燃料、石油、雜多なる消耗品を多額に消費し、所謂費用倒れの傾嚮を呈す。

大正八年度は

更に大分縣人を加へて張込小臺網に改めた結果、經濟的に運び得たり、遺憾なから漁獲其物は體肥太に過ぎ餌魚に適せず相も變らず前年來の失敗を操返すのみ本年は特に本縣漁夫を加ふ、可成内地式漁網で漁法を練習せしめ以て漁撈と餌魚料は如何なる關係あるやの觀念を與たき希望で、現に猶養成中である。

大正九年度は

稍々曙光を認む、愈々宮崎・鹿兒島・琉球・三縣漁夫を以て前年來の不成績に鑑み萬端の注意を怠らず、縣よりは油津在斯道に老練なる春田林之亟君を敎師として派遣を乞い同敎師の指揮の下に、浮海灣内、に敷込しが不幸にして敎師は足痛病に罹り歸國の已むなきに致らしむ、猶且つ位置、地形に依る時ならぬ潮流や季節風力の御添物の頂戴もの夥しく、期間は六、七の二箇月に涉るも操業日數僅に四十日前後にして亦もや本年も勞して效無く空しく終る。

大正十年度は

前敎師春田君は病中にも拘らず特に人選せられて濱田彌七君を代用敎師として派遣され、宮崎、沖繩、の漁師を以て前年の漁場に操業さるゝに獲物は相當に得られたが同じく操業捗々しからず更に漁場を添付圖面の個所に變更せしに八月中旬に至り偶然にも本文に掲げた。さかたたつくりが多獲された（此名稱は岩崎先生命名さる）。此たつくりを縣御派遣の漁撈手阪元金太郎君に委囑し餌料としての適否蓄養方法、撒餌

に就て親しく試驗を乞ひ引續き十月鰹漁の終期迄實驗さる、何れも成績良好なりとの快報を得た、然し八月以前の七、六、五の三個月に遡り如何なる變化を來すや如何、幸に此漁場開始以來の成績を繰返す事が出來得るなれば、鰹餌料としての意を强ふするに足る次第で、唯だ爾後は自己の及ばざるを倍々鞭韃し私を愛して下さる各位の御援助を乞ひ、以て斯る目的の下に達し得たきものである。

因に石垣島測候所長岩崎卓爾先生は常に本漁業に關し氣象・水溫・潮流の關係より魚族の遊動狀態を豫測されて御指導下さる。三木眞珠養殖場竹内久吉君は漁場の選擇。漁網の改良。漁夫支配等。幾多御指導下されたるは倶に深く感謝して止まざる次第であります。

（大正一一、四、二〇）

終

大正十一年十月五日發行　【非賣品】

沖繩縣八重山郡石垣村字大川十一番地
發行人　坂田安次郎

臺灣臺北市大和町三丁目二番地
印刷所　臺北印刷株式會社

393
437

終